

夢分析のディアレクティーク

広島国際大学心理科学部臨床心理学科 甲田純生

一 はじめに

J. ラカンは『エクリ』のなかで次のように述べている。「フロイトの提出した様々な概念の俗悪極まる乱用ぶりや、その品質下落をもとの状態に戻すためには、フロイトの発見をもう一度存在としての人間という決して古くなることのない根本的な問題からながめなおして、さらに検討しなくてはならない。」¹⁾フロイトが提起した様々な理論や概念の中でも、夢分析ほど「フロイトの乱用ぶり」が指摘される領野はないのではないだろうか。

フロイトが『夢判断』を世に問うたのは、1900年。夢が解釈の対象であること自体は、フロイトに始まったことではない。古来人類は、夢を様々な解釈してきた²⁾。フロイトの独創性は、理論に裏づけられた夢解釈の方法を提示した点にある。その一方で、巷にあふれているハウツーものに目を移すと、夢に出てくる様々な形象とその意味とが安易に等置されていることが多い。「蛇=男性器」「家=女性器」といった具合である。

確かに、フロイトのテキストにこのような安易な等置を許すファクターがないわけではない。しかし、フロイトの夢分析は本来、夢を見た被験者とフロイトとのあいだに交わされる〈対話〉のなかで行われるべきものである。つまり夢分析とは、解釈者が夢を一方向的に解釈するという一方通行的作業なのではなく、夢を媒介として被験者と分析家が対話し、その対話の中で被験者自身の自己解釈が促される、というものである。だとすれば、夢分析とは、被験者と分析家との間のディアレクティークが生み出すダイナミックな運動であり、そしてそれこそが、フロイトの夢分析がもつ本来の方法であったはずである。

小論では、ある具体的な夢の分析を通して、フロイト本来の、ディアレクティークとしての「夢分析の方法」を示したいと思う。

二 夢の内容

ここで分析の対象となるのは、N君が実際に見た夢である。N君は、私がまだ大阪にいた頃、私の非常勤先の某大学で私の授業に参加していた学生である。4年ほど私の哲学の授業に通っていたが、2年目のある日、哲学を志したいということで、私のところに相談にやってきた。以来、N君はよく私を訪ねてきた。私のほうも、彼に対してできる限りの助言を惜しまぬよう、彼に接した。お昼をともにしたり、我が家に招待したり、喫茶店で哲学の議論を交わしたりすることを重ねるうちに、私は彼を、一学生ではなく、一後輩としてみるようになっていった。彼も(大学院)進学のことや哲学のことなど、様々な疑問・質問を私にぶつけ、私を頼りにしてくれているようであった。

そうこうするうちに、N君は某大学の哲学科の修士課程に進み、名実ともに哲学を志すこととなった。そしてN君が修士論文を書かなければならない年に、私は広島に赴任して助教授の職を得て、突如N君の前から姿を消すこととなったのである。修士論文を前にして私というアドバイザーを突然失わねばならないことを知ったN君は、私が広島に赴任する前もその後も、心細いといったことを私に訴えていた。もちろん、私の広島赴任によって、私とN君の関係が断たれたわけではない。私が大阪に帰省した時には、彼との時間を少しでも作り、それ以外のときは、もっぱら電子メールを使って彼と音信をとった。

そしてある日私は、N君がある夢を見た、という報告をメールで受けたのである。以下、N君の了承を得て、N君の夢（およびN君とのやり取り）を転載する（文中で「先生」と呼ばれているのは、筆者のことである）。

「始まりはよく覚えてないんですが……。あたりは結構薄暗いところでした。いつものように、大学のキャンパスを、先生と二人で談笑しながら歩いていたように思います。「こうして君と気軽に会うことも出来んようになるなあ！」と、夢の中でも先生はお優しい言葉をかけてくださいました。

そうこうしているうちに、ふと前を見ると、何やらヘンな怪人が小学生とおぼしき子供をいじめているところに遭遇しました。この怪人というのが、仮面ライダーに似ていて、しかも顔がバツタなのです。確かに仮面ライダーそのものもバツタ顔ではありますが、夢に出てきたバツタは違う種類のバツタでした。本物の仮面ライダーはイナゴのようなバツタの顔なのですが、夢のバツタは、頭がシュッと尖がった種類のバツタ、私がよく小さい頃捕まえてた有名なバツタです。ですが、名前は思い出せません。

その小学生をいじめていたはずの仮面ライダーバツタが、我々二人の存在に気付くと、いきなりこっちめがけて襲ってきたのです。私は先生と二人して逃げ始めるんですが、逃げているうちに、二手に分かれたようで、先生は姿を消してしまわれました。そして、その仮面ライダーバツタは、私を追いかけてくるのです。必死に逃げようと走っているのですが、思うように足が回転しません。そうこうしているうちに、仮面ライダーバツタは、私のすぐ後ろにまで迫って来たのです。そして仮面ライダーバツタは、「ヒヒーッ！」という雄叫びあげながらいきなりジャンプして、私に飛び蹴りをしようとしたのです。あわや、やられるう……というところで目が覚めました。時計を見ると午前5時頃でした。」

三 夢の解釈

N君の見た夢の内容は、以上のようなものであった。N君は単に夢を報告してきただけではなく、この夢に対する自己解釈を付してきた。それは次のようなものであった。

「おそらくこの仮面ライダーバッタは、我が前に立ちはだかる難題、すなわち修士論文そのものではないでしょうか？今まで楽しく御指導いただいていた先生、これまでは先生に色々伺うことが出来るという心強さがあったでありまして、先生が広島に行かれるということで、先生がいらっしゃらなくなった後、小生は一人でその仮面ライダーバッタに追っかけまわされることになったのです。道端でいじめられてた小学生とは、私より一年先に修士論文と格闘していた大学院の友人のことではないでしょうか？」

私には、N君のこの自己分析は、大方向正しいように思われた。だが確信があったわけではない。そこで私は、N君に次のように問うてみた。

「君の分析が正しいとして、では、なぜ修士論文が仮面ライダーバッタに置換されたのだろうか？この二つには一体どんな共通性があるのだろうか？」

仮面ライダーバッタが修士論文の象徴であるのであれば、両者のあいだには何らかの関係がなければならぬ。全く無関係のものが象徴として使われるということはありません。しかしながら、ふつうに連想する限り、修士論文と仮面ライダーとは結びつかないのも、また事実である。とすれば、もし「仮面ライダーバッタ＝修士論文」というN君の解釈が正しいのであれば、仮面ライダーバッタと修士論文とを結びつける中間項がなければならぬ、ということになる。この中間項を発見できなければ、「仮面ライダーバッタ＝修士論文」というN君の解釈は、恣意的なものにとどまらざるをえないのである。この中間項を発見すべく、まずはN君に先のように問うてみたわけである。そしてそれに対するN君の答えは、次のようなものであった。

「一日考えてみたんですが、これはどうもわかりません。ただ、一週間ほど前に、テレビで仮面ライダーをやっているのを、朝見かけたような気がします。」

これは、フロイトの言う「昼間の記憶の残存」にあたる。起きているときに、意識の上ではそれほど気にならなかった印象を、夢の材料として用いるというものである。これにより、仮面ライダーバッタという夢の材料の出所は判明したことになる。だが、これによって「仮面ライダーバッタ＝修士論文」という解釈が裏づけられたわけではない。それどころか、材料の出所が判明したことにより、新たな疑問が浮かび上がってくる。N君は、テレビで仮面ライダーを見た。しかし、実際に夢に出てきた仮面ライダーは、テレビでの仮面ライダーとは異なり、変形されていた。この変形がなぜ行われたのか、という疑問である。フロイトによれば、夢において変形が行われているということは、そこに抑圧が働いている証拠である。この抑圧がどのような形で働いているのかを、説明しなければならない。

ここまで考えたとき、私は、N君の最初の夢の報告の中に、抑圧の明確な痕跡があることに思い当たった。それは夢の報告の次の箇所である。

「この怪人というのが、仮面ライダーに似ていて、しかも顔がバッタなのです。確かに仮面ライダーそのものもバッタ顔ではありますが、夢に出てきたバッタは違う種類のバッタでした。本物の仮面ライダーはイナゴのようなバッタの顔なのですが、夢のバッタは、頭がシュッと尖がった種類のバッタ、私がよく小さい頃捕まえてた有名なバッタです。ですが、名前は思い出せません。」

ここでN君は、夢に出てきた仮面ライダーバッタの顔が、小さい頃よく捕まえていた有名なバッタと同じ顔であることを報告している。つまり、このバッタはN君にとってなじみのバッタなのである。おそらくN君は、小さい頃このバッタの名前を何度も口にしたことであろう。にもかかわらず、彼は「名前は思い出せません」と言っている。「思い出せない」ということは、当然かつては知っていたのである。ここには大きな抑圧が働いている。しかも、抑圧されている内容は、「仮面ライダーバッタ=修士論文」ということではない。なぜなら、このこと自体は、N君の意識の上に登っているからである。「仮面ライダーバッタ=修士論文」という構図の背後に、何か抑圧されるべき内容が隠されているに違いない。鍵は、N君が忘れていたバッタの名前である。このバッタの名前が判明すれば、「仮面ライダーバッタ=修士論文」という結びつきの謎が判明するだけでなく、この結びつきの背後に抑圧されている内容も、明るみに出るはずである。そこで私は、N君に次のように薦めてみた。

「バッタの名前が思い出せないと言っていたね。その名前に手がかりが潜んでいるのではないかと思う。図鑑か何かでそのバッタの名前を調べてごらん。そして、その名前を見てすぐに連想するものを列挙していけば、修士論文との関連がわかるだろう。あるいは、バッタの名前だけで、すぐ修士論文との結びつきが判明するかもしれない。」

修士論文と仮面ライダーバッタの間に挟まれ抑圧されている中間項は、一つであるとは限らない。そこで私は、名前を調べるだけでなく、名前から連想するものを列挙することを薦めたのである。

しかし幸いなことに、この夢の歪曲は、それほど複雑なものではなかった。N君が調べた結果、バッタの名前が「ショウリョウバッタ」であることが判明した。この名前を見たとき、「仮面ライダーバッタ=修士論文」という、N君の最初の解釈が正しいものであることを、私は確信した。なぜなら、「ショウリョウバッタ」は「シュウリョウ〈修了〉バッタ」であり、「シュウロン〈修論〉バッタ」であるからである。これは、メトノミーと呼ばれるタイプの置換である。要するに、音声の類似に基づく変換であり、夢ではよくあるパターンである。

注目すべきことは、N君自身がこの類似に全く気づいていないことである。これは、この変換に

非常に大きな抑圧がかかっていることを意味している。

さらにN君は、「ショウリョウバッタ」の名前とともに、夢をとく鍵となる、非常に重要な連想を書いてよこしたのである。それは次のようなものであった。

「一応ショウリョウバッタで連想するものを考えてみたのですが、関連のありそうなことは思いつきませんでした。一つ思い出すのは、小さい頃、田舎でしたので、ほんの一時期ですが、そのへんのバッタやカエル捕まえては、爆竹で破裂させて遊んでいたことを思い出します。今思えば、小生もかなり残虐なことをしていたと思いますが、その思い出が自責の念、後ろめたさとなり、今ごろになって出てきたのかもしれない。」

この連想で、夢の全貌が明らかとなった。夢では、小学生が仮面ライダーバッタにいじめられていた。この場面を「シーンA」としよう。小学生というのは、おそらく修士論文と格闘していたN君の友人であると同時に、小学生の時のN君自身の姿でもある。N君は小さい頃、バッタをいじめていた。シーンAはその姿を逆転したものである。この逆転の意味はこうである。N君は、かつてN君がいじめていたバッタに、N君自身の分身をいじめさせることで、贖罪を行っているのである。この贖罪の意味は二重である。というのも、ショウリョウバッタ（＝シュウロンバッタ）は、かつてバッタをいじめたN君に仕返しをすると同時に、シュウロンバッタとして現在のN君に仕返しをしてもいるからである。つまり、この夢にこめられたメッセージはこういうことになる。

『自分がいま修士論文に苦しめられているのは、かつて自分がショウリョウバッタをいじめた報いであり、仕方がないことなのだ。だから、仮に自分が修士論文を書けなくても、それは故あることであり、仕方がないのだ。』

夢のポイントは、おそらくこのメッセージの前半ではなく後半にある。バッタをいじめたことに対する罪悪感は、この夢のテーマではないであろう。それは、「今思えば、小生もかなり残虐なことをしていたと思いますが、その思い出が自責の念、後ろめたさとなり、今ごろになって出てきたのかもしれない」というN君の文章からもわかるように、この罪悪感がN君自身の意識に明確に登っていることからわかる。N君自身に明確に意識されている内容は、抑圧された内容ではありえない。バッタをいじめたことに対する自責の念は、夢が本当に言いたいことを表現するために、借りてこられたものであろう。

とすれば、この夢の真意はメッセージの後半にあることになる。つまり、この夢は「修士論文が書けなかったら？」というN君の不安と恐怖を軽減することが目的であり、万が一修士論文を書けなかった場合を正当化することが目的なのである。

バッタが単なるバッタではなく、仮面ライダーと化して登場していることも重要な意味をもつ。

仮面ライダーは正義の味方である。これは、仮面ライダーバッタが小学生をいじめることも、現在のN君に跳び蹴りをする 것도、ともに正義の名のもとに行われていることを意味している。つまり、仮面ライダーバッタが小学生をいじめているのは、N君がバッタをいじめたことの報いとして正当化され、それと同時に、N君が修士論文に苦しみ書けないことそのものが、正当化されているのである。

なぜこのような正当化が必要であったのか。N君は、修士論文から逃げたくても逃げられないからである。「必死に逃げようと走っているのですが、思うように足が回転しません」とN君は言っていた。仮面ライダーバッタに追いかけてられているN君は、逃げようにも足が回転せず逃げられなかったのである。と同時に、「思うように足が回転し」なかったのは、修士論文の準備が思うようにはかどっていないことをも、表しているのかもしれない。

おそらく、N君が仮面ライダーをテレビでたまたま見たのが、この夢のきっかけであろう。「仮面ライダー⇒バッタ⇒ショウリョウバッタ⇒修士論文」という形で連想が進み、修士論文にまつわる不安を核としてコンプレックスが形成され、さらに「ショウリョウバッタ&いじめ」や先生といったほかの材料が、そのコンプレックスに提供されてできたのが、この夢なのであろう。

精神分析家が患者に対してするように、私は以上の解釈をN君に伝えた。N君の反応は、「おっしゃるとおりだと思います」というものであった。N君は別に精神病患者ではないのであるから、抑圧された内容を提示されたことに対して、さしたる抵抗を示さないのは、不思議なことではないであろう。

四 解釈のプロセス

以上の解釈のプロセスを振り返って、解釈のポイントとなった点を、順にまとめてみよう。

- ①夢に対するN君自身の自己解釈：「仮面ライダーバッタ＝修士論文」
- ②N君の自己解釈に対する私の問いかけ：「なぜ修士論文が仮面ライダーバッタに置換されたのか」
- ③N君の証言：「仮面ライダーをテレビで見た」
- ④抑圧の痕跡の発見：「バッタの名前を思い出せない」
- ⑤N君がバッタから連想した内容：「小さい頃バッタをいじめていたという事実」

①のN君自身の自己解釈がなければ、この夢分析は開始されなかったであろう。先にも触れたように、通常の連想からは仮面ライダーバッタと修士論文は結びつきようがないからである。したがって、N君がただ単に夢の内容だけを最初に報告していたならば、ただの不可解な夢で終わっていたと思われる。

②の私の問いかけは、夢の材料を明らかにするために必要であった。というのも、この問いかけ

に対するN君の答が、「ただ、一週間ほど前に、テレビで仮面ライダーをやっているのを、朝見かけたような気もします」という非常に心もとないものであることからわかるように、N君が仮面ライダーをテレビで見たという事実は、私が問いかけるまで、N君には明確には意識されていなかったからである。この事実はN君の潜在意識にとどまっていたと思われる。

しかしながら、解釈の上で決定的に重要であったのは、明らかに④と⑤、とりわけ⑤である。夢の内容に関するN君の報告の中で、抑圧の明確な痕跡といえば、仮面ライダーが変形されて登場していることと、バツタの名前をN君が思い出せないことの二つしかない。この二つはともにバツタに関わることであり、同一の抑圧の結果である。

バツタの名前から、仮面ライダーバツタと修士論文の結びつきが保証された。しかしながら、夢の解釈のところでも触れたように、この結びつきそのものが夢の潜在内容ではないし、抑圧されるべきことでもなかった。この結びつきの背後に隠された、夢の真のメッセージを聞き取るためには、⑤のN君自身の連想が不可欠であった。

このN君の連想は、何によって促されたのであろうか。私による呼びかけによってである。私は、N君が思い出せないといっていたバツタの名前を調べると同時に、そのバツタの名前から連想するものに注意を向けるよう指示していた。

私の指示の本来の意図は、次のことにあった。つまり、仮面ライダーバツタと修士論文との間の中間項が一つではなかった場合（要するに抑圧が複雑な形で行われた場合）、バツタの名前から連想される内容が、両者の結びつきを解く鍵となるかもしれない。その鍵を見つけることが、本来意図したところであった。その場合、「ショウリョウバツタ」というバツタの名前そのものから連想されるものが重要となる。しかし実際にN君が連想したのは、おそらくバツタの名前そのものからではなかったと思われる。なぜならN君は「一応ショウリョウバツタで連想するものを考えてみたのですが、関連のありそうなことは思いつきませんでした」と言っているからである。

客観的に見た場合、「ショウリョウバツタ」という名前と「修士論文」との音の類似性は、比較的明快であるように思われるが、先にも述べたように、N君自身はこの類似性に全く気がついていない。それは、この名前そのものに大きな抑圧が働いていることを示している。連想法においては、連想のストップした言葉が抑圧に関わるタームである、ということは定石である。これを逆からとらえれば、抑圧が大きく働いていることばから何かを連想することは難しいということである。したがって、N君はバツタの名前そのものからは何も連想しなかったのであろう。

N君が連想した過去の体験は、バツタの名前からではなく、バツタそのものからの連想であった。その過去の体験（N君が小さい頃、バツタをいじめていたこと）とは、夢がメッセージを伝えるために使用したものである。

いずれにせよ、N君の連想がなければ、そしてひいてはN君に対する連想への促しがなければ、夢の分析は不成功に終わったと思われる。すると、先の①から⑤のプロセスを、次のようにまとめることができる。

①N君の自己解釈【連想】→②私の問いかけ【連想の促し】→③N君の証言【連想】
→④私の問いかけ【連想の促し】→⑤N君の連想【連想】

このように夢分析とは、被験者と分析者とのあいだに行われる対話＝ディアレクティークのなかで完遂されるものなのである。

五 おわりに

以上のように、夢分析が本来、被験者と分析者とのあいだのディアレクティークであるならば、ハウツー本の夢分析は、全くのナンセンスであると言わなければならない。このようなナンセンスがまかり通っているのには、いくつかの理由がある。

まず、フロイト自身が対話によらず夢分析を行うことがある。レオナルド＝ダ＝ヴィンチが見た夢の分析などは、その例である³⁾。この場合注意しなければならないことがある。第一に、こういった解釈は治療を目的として行われておらず、それゆえこれらの解釈は暫定的なものにすぎない。第二に、記録されたすべての夢を、フロイトが解釈できるというわけではない。フロイトが著作の中で分析して見せた「記録された夢」は、たまたま分析可能 — それが暫定的なものであるにせよ — であったのである。

では、なぜそれらは分析可能であったのであろうか。ことばには様々な意味とイメージがまわりつくのと同様、夢に出てくる形象にも、様々な意味とイメージが隠されている。それらには、非常に個人的なものもあれば、多くの人間に共通する普遍的なイメージも含まれる。そして、被験者との対話なしに分析しうるのは、後者のレベルにおいてなのである。そしてここに、ハウツー本のようなナンセンスがまかり通る第二の理由がある。

夢の形象がもつ意味・イメージのうちの「普遍的イメージ」だけを安易に固定化し、それによって安直に夢の解釈を行うことは、厳に諫められなければならない。夢をそのダイナミズムにおいてとらえるためには、本論考の夢分析が示したように、連想にもとづく被験者と分析家の対話が不可欠なのである。夢分析は、被験者と分析家との間のディアレクティークによって、はじめて可能なのである。

注

(1) J. ラカン『エクリ II』(佐々木孝次訳、弘文堂、1977年) 239頁

(2) 例えば次の書を参照。M. ポングラチュ、I. ザントナー『夢の王国—夢解釈の四千年』(種村季弘、池田香代子、岡部仁、土合文夫訳、河出書房新社、1987年)

(3) Freud, S., *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci*, Gesammelte Werke VIII, S. Fischer Verlag Frankfurt am Main, 1973.